高知県立文学館ニュース

高知県立文学館

KOCHI LITERARY MUSEUM NEWS

藤並の森

Vol.87

リレー随筆

おばけずき孤蝶の発見

東　雅夫

馬場孤蝶といえば、日本近代文学の草創期に、海外文学の翻訳や文芸批評の分野で指導的役割を果たしたひとりであり、北村透谷や島崎藤村、樋口一葉といった文豪たちとの交友でも、よく知られていよう。

もっとも私自身は最近まで、孤蝶という文人に対して、右に記した以上の積極的関心を寄せていたわけではなかった。それが一転、にわかに興味を掻きたてられた契機は、この夏に書き下ろし刊行した拙編著『文豪たちの怪談ライブ』（ちくま文庫）にあった。

同書は、大の「おばけずき」で知られた文豪・泉鏡花を中心に、柳田國男や芥川龍之介、鏑木清方や喜多村緑郎といった、明治後期～大正期の文人墨客名優たちが、盛んに相つどってはオールナイトの怪談会を催し、おばけ話に嬉々として興じた経緯を跡づけた、いたって浮世離れした内容の書物である。

そしてその中で、ひときわ異彩を放っているのが、余人ならぬ馬場孤蝶だったのである。

たとえば今から一世紀ほども前の1908年（明治41）、文芸誌「趣味」4月号に掲載された座談会記事「不思議譚」は、文豪たちによる怪談会を採録した最初期の貴重な文献だが、出席者の筆頭に孤蝶の名が、与謝野鉄幹や小栗風葉と並んで掲げられている。そして、一葉の母親が幽霊の来訪をうけたという話などを披露しているのである。

また、雑誌「新小説」の1924年（大正13）4月号と5月号に掲載された座談会「怪談会」でも、芥川龍之介、菊池寛、泉鏡花、長谷川伸、白井喬二ら総勢13名の多彩な面々と共に参戦。地元高知の怪談話を次から次へと開陳して、他の参加者を圧倒する勢いなのだ。

ともすれば謹厳実直なイメージの孤蝶に、こんな思いがけない一面があったとは！

思えば高知は、和漢にわたる怪談文芸の大家として知られた田中貢太郎や、探偵小説普及の先覚者・森下雨村らの故地でもあった。

高知県立文学館には、貢太郎の資料調査で大変お世話になったという因縁もある。久方ぶりの高知再訪を、今から心待ちにしている次第。

【追記】

本稿のゲラが届いて、文学館サイドで用意してくださった資料写真を一見した私は思わず興奮を禁じえなかった。孤蝶とともに「ミステリアス高知文学」の三人衆を成す貢太郎と雨村が並んで写っているのもさることながら、鏡花文学の熱心な崇拝者であった久保田万太郎と水上瀧太郎、また鏡花らの怪談会の常連メンバーでもあった小山内薫の顔も見えるではないか。孤蝶の幅広い交友関係を示すとともに、文壇の怪談人脈との繋がりも窺える一葉である。

（アンソロジスト／文芸評論家）

▲孤蝶還暦祝い（昭和３年星ヶ岡茶寮にて）
（前列左より）島崎藤村・馬場孤蝶・森田草平・生方敏郎
戸川秋骨・小山内薫・岡野知十
（後列左より）田山花袋・久保田万太郎・水上龍太郎・森下雨村
田中貢太郎・岡野馨・土岐善麿

注目の企画展ご紹介します！

馬場孤蝶
生誕150年記念展
～馬場孤蝶とその時代～

令和元年（2019）11.30（土）▶令和2年（2020）1.19（日）

開館時間　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
12月27日（金）～1月1日（水）までは年末年始のため休館

本邦初訳のトルストイ『戦争と平和』などの翻訳でも知られる馬場孤蝶は、令和元（2019）年、生誕150年を迎えます。

当館では、この記念の年に、孤蝶の生涯と文学の軌跡を総合的に紹介する、初めての展覧会を開催します。

馬場孤蝶は、土佐藩士、馬場来八の四男として、明治2（1869）年11月8日、高知市金子橋（現・升形）に生まれました。子どもの頃は病弱であり、10歳のときに姉駒子を頼って両親とともに上京して後、生涯において、高知へは、3回ほど帰っています。1度目は、明治学院を卒業後、高知共立学校の教師として、2度目は、息子昂太郎をともなっての講演のため、3回目は、単身講演のためと高知との接点は、決して多いとは言えません。

しかし、「文学界」の同人であった星野天知は、孤蝶について「意気颯爽、革新を呼ぶ」と、樋口一葉は、「悲歌慷慨の士なりとか、嬉しき人なり」とそれぞれ日記に記しており、さらに、平田禿木は、「稀にみる能弁家で、一度口を開けば、忽ち立て板に水を流すように喋って退ける」と彼の絶筆となった「文学界前後」に記しており、このことから、孤蝶の土佐人らしい気質が窺えます。

明治学院を卒業すると、各地の中学校で教鞭をとりますが、一方で、明治学院の同窓生、島崎藤村らと「文学界」の同人として、ロマンチックな詩や小説を書き残しています。

また、文学界の同人たちは、準同人であった一葉に対して、一様に思慕の念を感じさせるのですが、彼女に西欧文学の魅力を伝授したのは孤蝶であり、一葉亡き後、彼女の文学を世に紹介し、文学碑建立のために奔走したのは彼でした。

明治39（1906）年から昭和5（1930）年までの24年間は、慶応義塾大学の教授として、学生たちに大陸文学を紹介します。彼のユニークな講義は、慶應のみならず、講師を務めた早稲田大学の学生たちにも人気があったそうです。

この頃、孤蝶は、幸徳秋水、荒畑寒村らとも交流しており、大逆事件前後の時代閉塞の中で、骨のある評論を書いたり、青鞜社主催の講演会で「婦人のために」を講演するなど、女性の社会進出や地位向上にも力を尽くしました。さらには、夏目漱石、平塚らいてう等の支援で衆議院議員に立候補したりしています。

孤蝶は、10歳までしか土佐にはいませんでしたが、このような、70余年の生涯を振り返って見ると「土佐人らしい反骨の精神を貫き通した」と言えるのかもしれません。

本展では、翻訳家としての孤蝶、文筆家としての孤蝶、そして、知識人としての孤蝶と様々な顔を持つ馬場孤蝶の魅力を紹介するとともに、彼と同時代に活躍した天知、藤村、一葉、さらには森鴎外、漱石といった文壇を代表する作家たちとの幅広い交流も併せてご紹介します。

最後になりましたが、開催にあたり、ご協力賜りました関係各位に心より御礼申し上げます。

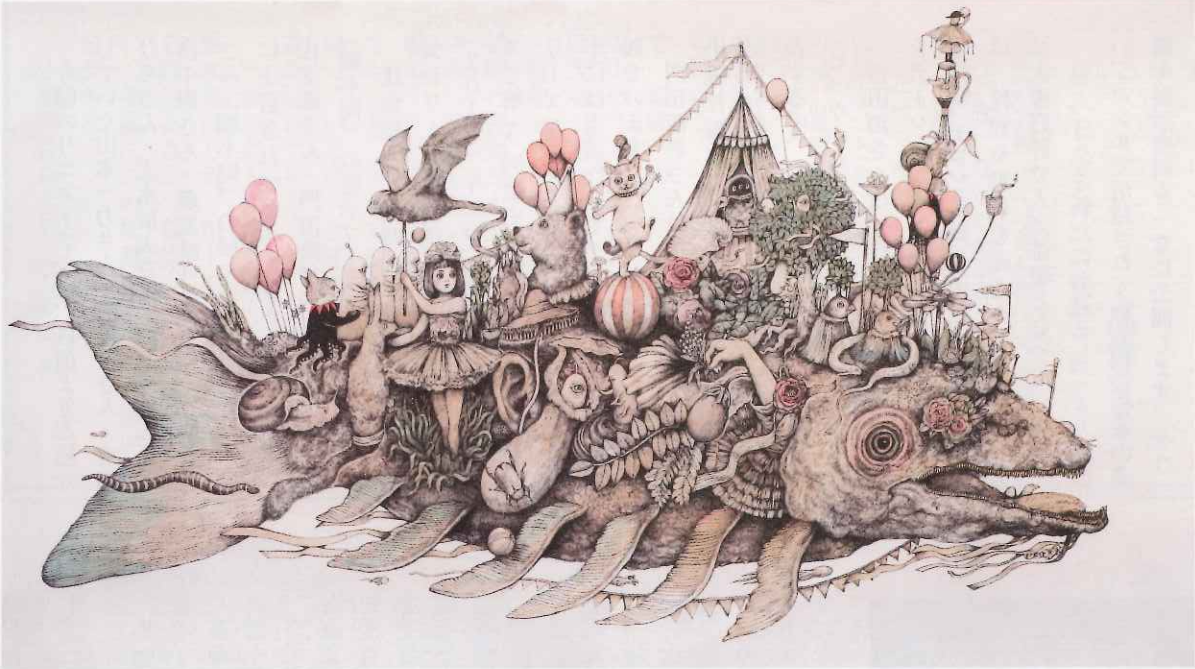
（学芸課長／津田加須子）

ヒグチユウコ展 CIRCUS

2020.2.1 SAT 3.29 SUN

開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

THE CIRCUS IS COMING TO TOWN!



<Circus> 2018年 ©Yuko Higuchi

令和2年2月1日（土）から3月29日（日）まで、「ヒグチユウコ展　CIRCUS」が高知県立文学館にやって来ます！

空想と現実を行き交う自由な発想と細密なタッチで作品制作を続ける画家・ヒグチユウコさん。20年ほど前から、東京を中心に定期的に個展を開催する一方、書籍の装画や様々な企業への作品提供、自身のブランドによるプロダクトデザインなど活躍の幅を広げ、絵本作家としても平成26年の『ふたりのねこ』以降7作品を発表しています。

本展は、幅広い活躍をみせるヒグチユウコさん自身初となる大規模な展覧会として、東京（世田谷）、兵庫（神戸）、広島（三次）、静岡（三島）と全国各地を〝巡業〟し、四国では初となる高知に登場します。

本展覧会では、絵本の原画が勢揃いするほか、書籍の装画から最新作まで、約20年の画業の中で描かれた多くの作品を紹介します。さらには、展覧会に合わせて発行された画集『CIRCUS』（令和元年）の原画や、本展覧会のために描き下ろした作品も展示されるなど、近年ますます活躍の場を広げる作家の、約20年にわたる画業の中で制作した代表作の数々を鑑賞できる貴重な機会です。

また、展示室の外にも、これまで発表された絵本などを自由に閲覧できるコーナーや、ヒグチさんが選ぶ絵師「絵金」作品の展示、さらにはオリジナルグッズの販売なども用意し、ヒグチユウコさんの魅力を十分に楽しむことができます。

ヒグチユウコさんが描く猫や少女、キノコ、この世ならぬ不思議ないきものたちが繰り広げる、楽しくもどこか切ないサーカス（CIRCUS）の世界をぜひご堪能ください。

（学芸課／道脇夕加）

<ねこのピエロ> 2018年 ©Yuko Higuchi

常設展虫めがね

シリーズで変わる常設展をご紹介！

常設展「現在の作家コーナー」をリニューアルします！

常設展「現在の作家コーナー」では、高知県出身の現役作家をご紹介しています。長きにわたり文学界で活躍されている方、老若男女問わず広く支持を集めている方々の略歴や主な著作をパネルでご紹介し、草稿などの資料や数々の著書も展示。どなたも高知県が誇る作家であり、県内外のお客様へと各々の作品の持つ魅力を最大限にお届けするコーナーとなっています。

今回のリニューアルは、以前よりご紹介していた山本一力さん・嶋岡晨さん・有川ひろさん・志水辰夫さん・西澤保彦さん・畠中恵さん・藤原緋沙子さん・中脇初枝さん（順不同）の展示に加え、最近大いに注目されている作家として、新たに辻堂魁さん・門田隆将さん・吉田類さん（順不同）の展示ブースを設けます。

辻堂魁さんは時代小説家。数々の人気シリーズを執筆されており、平成28（2016）年には「風の市兵衛」シリーズで第5回歴史時代作家クラブ賞（シリーズ賞）を受賞。平成30（2018）年には当該作品でテレビドラマも放映されています。

門田隆将さんは作家・ジャーナリスト。出版社編集部時代には、様々な分野で記事を執筆。独立後も数々の話題作を発表する中、平成30（2018）年に絵本『ヒョウのハチ』も発表されています。

吉田類さんは、作家・俳人。酒場や旅をテーマに酒場と酒場をめぐる人間関係を執筆。テレビ番組「吉田類の酒場放浪記」は、性別や世代を超えたお酒好きの方に大変好評で人気番組となっています。

以上3名を新たにお迎えし、より幅広いジャンルで活躍されている現役作家の業績や展示資料を一堂に公開します。ぜひ、ご期待ください。

（学芸課／檜垣佳甫）

新資料紹介

宮尾登美子さん愛用の品々

高知県出身の直木賞作家・故宮尾登美子さん愛用の、深紅の珊瑚の指輪や薔薇の花を模した帯留めなど、10点の品々がご遺族から寄贈されました。

宮尾さんは『櫂』で太宰治賞を受賞後、女流文学賞、直木賞、吉川英治文学賞、菊池寛賞、親鸞賞など、数々の文学賞を受賞し、そのたびに故郷・高知では「受賞を祝う会」が開かれ、これらの品々が贈られたそうです。

『一絃の琴』で直木賞を受賞した際には、一絃琴（いちげんきん）の蘆管（ろかん）を模した珊瑚の帯締めを贈られました。

一絃琴というのは長さ約110㎝、幅約10～15㎝の胴にたった一絃の糸を張って、指にはめた蘆管で弾く美しい音色の楽器で、古くは「須磨琴」と呼ばれていました。平安時代、須磨に配流になった在原行平が弾いたのが始まりとする伝説があります。

宮尾さんの作品『一絃の琴』は明治時代に土佐の地で一絃琴の塾を開いた市橋苗と、才能あふれる美しい弟子・蘭子という対照的な二人の女性の確執と、一絃琴に向き合うそれぞれの姿を描いた長編です。

宮尾さんは、昭和37年の秋、蘭子のモデルとなる人間国宝・秋沢久寿栄の演奏を聴く機会を得、『一絃の琴』創作を決意します。昭和37年といえば「連」で女流新人賞を受賞した年で、宮尾さんはこの後太宰治賞受賞までの10年間、苦節の時期を過ごしますが、その間も原稿を大切に持ち続け、昭和53年4月28日の日記に「『一絃の琴』ついに終わる。ついに終わる。指折り数えてみると十七年。」とあり、5度書きなおしたという長篇『一絃の琴』が完成、翌年直木賞を受賞したのでした。

宮尾さんは、「祝う会」から贈られた珊瑚の品々を愛おしみ、喜んで身に着けていたといいます。数々のベストセラーを世に送り出した日本を代表する作家ですが、この高知の特産品である珊瑚の品々からは、郷土の人々にいかに愛され、郷土をいかに愛した作家であったかが伝わってきます。

（学芸課／岡本美和）

土佐文学さんぽ 85

馬場孤蝶と樋口一葉

高橋　正

郷党の先覚、馬場孤蝶は明治2年、高知市金子橋の旧武士の家に生まれた。自由民権左派の闘将馬場辰猪の実弟である。ダンディー、モダンなフェミニストで、慶応三田の学生たちに文学のみならず、酒、煙草、「女」も教えた。孤蝶を囲繞（いにょう）する才媛たちに与謝野晶子、神近市子、伊藤野枝、平塚らいてう、山川菊栄らがいた。特に樋口一葉との仲は有名。

一葉の日記には孤蝶のことを「うれしき人也」「こころうつくしき人」「誠ある人」など、のろけきった記述が見られる。実際、孤蝶は連日、一葉宅に入り浸っていた。「終日馬場君と語る」「馬場君（略）此夜もいたくふけてかへる」などと一葉日記にある。

孤蝶は一葉に西洋文芸の新知識を熱心に吹き込んだ。この耳学問が一葉晩年の名作「たけくらべ」「にごりえ」「十三夜」などの創出に一役買ったことは間違いあるまい。

「たけくらべ」末尾、真如が修行に旅立つときに美登利の感ずる悲しみは、孤蝶が彦根中学の教師として赴任すべく、東京を去るときに一葉の感じた悲しみがこめられているとも読める。一葉は彦根の孤蝶宛手紙で、孤蝶への恋情を「よそにきく逢坂山ぞうらめしきわれはくもゐのとほき隔てを」とリアルに詠んでいる。

昭和58年4月、父祖の地に帰った孤蝶の長男昂太郎さんは「父は一葉さんに傾倒していて、一葉さんと結婚していたかも知れないんです。一葉さんもまんざらでなかったらしいと聞いています」と述懐している。貴重な証言である。

一葉の恋人には、創作上の師半井桃水をはじめ、川上眉山、斎藤緑雨ら諸説あるが、孤蝶本命説を採りたい。孤蝶にこの推測をそそる心憎い句がある。

一葉の住みし町なり夕時雨　孤蝶

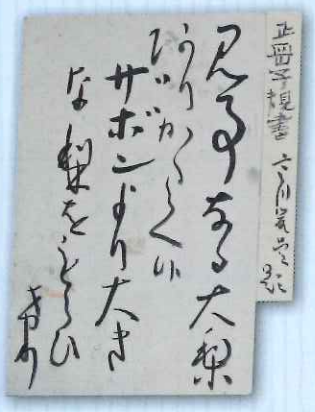
（高知高専名誉教授）

▶高知市鷹匠町にある馬場孤蝶の直筆の碑。表に「一輪ノ皎月　中天ニ　輝クヲ見タリ」と刻まれている

資料受贈報告

―寄贈資料から―

若尾瀾水あて正岡子規はがき
明治32年10月19日消印
下川英子氏寄贈



このたび、高知県出身の俳人・若尾瀾水の膨大な資料群をご遺族より寄贈いただきました。内容は、瀾水が収集していた土佐近世文人の書簡や短冊、また日本画を嗜んでいた瀾水の画などです。

若尾瀾水は明治10（1877）年、吾川郡弘岡下ノ村（現・高知市春野町）生まれ。京都三高、仙台二高を経て東京帝国大学に進学し、正岡子規の句会に出席するなど俳句にも熱心に取り組みますが、子規の死後、子規を批評する「子規子の死」を発表し当時の俳壇から指弾されます。郷里に戻ってからは収集と近世文人の研究に没頭し、俳誌「海月」を主宰して地方俳壇に復活しました。

今回ご紹介するのは、河東碧梧桐の筆で「寸裂錦」と題字の書かれた冊子に貼られた、瀾水あて子規はがきです。当時仙台二高在学中の瀾水の住まいにあてて送られたこのはがきは『子規全集』にも掲載されており、全集編纂にあたって瀾水が協力したことがうかがえます。

はがきには「見事なる大梨／ありかたく候」とあり、「ザボンより大き／な梨をもらひ／けり」の句が書かれています。ザボンとは土佐で言う文旦のこと。大きな梨を贈った瀾水への礼状で、のびのびとした子規の筆致と簡潔でありながら意を尽くした言葉が見事です。

（学芸課／川島禎子）

受贈報告（令和元年8月～10月）敬称略

▼**英保迪惠**・「櫂 第一部（私家版）宮尾登美子著刊」他
▼**橋田憲明**・「俳句界 25巻7号　文學の森編刊」
▼**小松弘愛**・「詩と思想・詩人集2019「詩と思想」編集委員会編　土曜美術社出版販売刊」他
▼**根津真介**・「詩集 何処までも　根津真介著　土曜美術社出版販売刊」
▼**山崎波浪**・「未完 山崎波浪第二歌集 高知歌人叢書第82編　山崎波浪著　高知歌人社刊」
▼**藤原義一**・「槇村浩が歌っている　藤原義一著　飛鳥出版室刊」
▼**藤本知子**・「紙芝居 ちっちゃいこえ　アーサー・ビナード脚本　丸木 俊・丸木位里 絵　童心社刊」
▼**岩波書店**・「定本 漱石全集 第22巻 書簡 上　夏目金之助著　岩波書店刊」他
▼**日本歌人クラブ**・「日本歌人クラブ創立70周年記念誌　日本歌人クラブ編刊」

企画展

言葉のチカラ、声の魔法展レポート

文学作品からあふれ出る〝言葉の生命力〟。その魅力を多彩な形で紹介した「言葉のチカラ、声の魔法展」が11月17日（日）に閉幕しました。

会期中は、県民参加型の朗読イベント「耳和（みみな）ぐ」やカルチャーサポーターの皆さんによる朗読の会、こうちまんがフェスティバル「まんさい」とコラボしたスタンプラリーを開催。さらに、島本須美さんのご厚意で急遽サイン会も開催することが出来ました。

展示では、階段に掲示した名言にはじまり、読書の歴史、さまざまな言葉あそび、県内外の文学者の名言・名作のフレーズを紹介。フレーベル館にご協力いただき「言葉を味わう」をコンセプトにした試作絵本『たべることば』も展示することが出来、お客様から好評の声をいただきました。

なかでも大好評だったのが、高知県出身の声優・島本須美さん、小野大輔さんにご協力いただいた声優コーナーです。Q&A形式で声優を続けるうえで大切な事などを教えてくれた他、映像、朗読音声などの「声」で、展示がグッと楽しくなるステキな魔法をかけてくださいました。

お客様からは「本当に魔法にかかったようだった」「〝今〟に合った企画だ」といった感想も頂戴しました。これからも、文学表現の奥深さや魅力を多彩に紹介していきたいと思います。最後になりましたが、島本須美さん、小野大輔さんはじめご協力いただきましたすべての皆さまに心より御礼申し上げます。

（学芸課／福冨陽子）

▲展示の様子

第22回児童生徒文学作品朗読コンクール県審査及び記念講演会を開催しました！

高知県立文学館では、毎年、県内の小中学生を対象にした朗読コンクールを開催しています。22回目を迎えた今年は、8月の地区審査（西部、高知、東部）を通過した20名の児童・生徒の皆さんが、11月24日の県審査に出場しました。

コンクールに向けて、作品と向き合い、練習を重ねて本番当日に臨む生徒さんたち。一人一人の声で表現される作品世界と表情豊かな朗読に、会場は熱気と感動に包まれました。生徒さんたちの発表を通して、〝自分の声に想い（心）を乗せて届ける〟という朗読の魅力にあらためて気づかせてもらったように感じています。

また、今年のコンクールでは、特別審査委員に高知県出身で声優の島本須美さんをお迎えし、「本の中には『うわ～！』がいっぱい」と題して記念のご講演をいただきました。講演の中では、島本さんご自身がこの日のために選んだ作品を朗読してくださる場面もあり、〝声のプロ〟として長い間活躍を続けておられる島本さんの朗読を直に聴けるという、またとない貴重な時間となりました。気持ちの込め方や声の出し方など、朗読についてお話をしてくださった講演会は、終始和やかな雰囲気で、島本さんの魅力にますます魅了された1時間でした。

今年も、参加してくださった児童生徒の皆様をはじめ、保護者の皆様、学校の先生方、そしてたくさんの皆さまのご協力を得て、朗読コンクールを開催することができましたこと、心から感謝申し上げます。

（学芸課／道脇夕加）

▲第22回朗読コンクール県審査・受賞者の皆さん

ショップより

元号が、平成から令和になった今年もあと少しで新しい年を迎えようとしています。

ミュージアムショップでは、現在、開催中の企画展「馬場孤蝶生誕150年記念展～馬場孤蝶とその時代～」にあわせて、孤蝶と親しい付き合いのあった作家、島崎藤村や樋口一葉、森鴎外、夏目漱石などの書籍や、孤蝶が好きで、名前の由来にもなった「蝶」をモチーフとしたハンカチや足袋ソックス、バッグにも付けられるようになっているスライドミラー、ヘアゴムやストラップなど和柄のグッズをご用意しております。

5千円札の顔としても馴染みのある樋口一葉。「台東区立一葉記念館」のオリジナル商品（一筆箋・絵ハガキ・クリアファイル）も販売しております。

寒さも少しずつ厳しくなり、本格的な冬の訪れを感じられる頃になりましたが、当館にお越しの際には、是非ショップもご覧になって下さい。（総務事業課／山﨑幸乃）

館長室から

季節の移ろい

一雨ごとに気温が下降していく日々。長く感じられた今年の夏もいつのまにか過ぎ去り、晩秋の風情が漂う。

お城の木々に囲まれた文学館の周りでも、時折行き来する人が落ち葉を踏みしめて歩く音がする。

この森の中にキンモクセイの大木があって、今年の秋にもその香りがまわりいっぱいに広がっていた。

この香りをかぐと、はるか昔の小学校の運動会、祖父母との農作業、図書館での孤独な試験勉強といった私にとっての秋にまつわる様々な記憶が、呼び起こされる。

人の営みは季節とともにあることをつくづく実感する。

さて、日本には四季があるといわれるが、最近は春と秋が短くなったように感じるのは私だけだろうか。

かたや、いにしえの人々はゆっくりと移ろっていく季節の中で春と秋を慈しみ、文字に綴った。

私の好きな万葉の歌人額田王は、万葉集1巻16の長歌において、春と秋いずれが良いかとの問いに、「どちらにも良さがあるが、黄葉、青葉を手に取りさまざま思う秋山こそ素晴らしい」と秋を選んでいる。

とどまることなく移ろい、繰り返される季節。その一刻一刻を惜しむからこそ、人々はそれを言葉に刻み、文章に表してきたのではないだろうか。

ふと、こうした季節の移ろいを考える日々である。

（岡﨑順子）

ご利用ください。収蔵資料データベース公開中！

当館では昨年6月より、収蔵資料データベースの一部をインターネットで公開しています。公開対象は雑誌12、400件超。当館では主に高知ゆかりの作家・詩人に関する資料を収集していますので、高知色の濃いデータベースです。

公開当初は1万件を漸（ようや）く超える程度でしたが、その後も郷土雑誌の登録作業を優先的に進め、コツコツと公開件数を増やしています。まだまだ道半ばですが、高知文学探索ツールとして、調査・研究にお役立ていただければ幸いです。

なお、資料のご利用には事前の申請が必要です。詳しくは当館ホームページ「ご利用案内」の「所蔵資料利用申請」をご参照ください。

（学芸課／小松路代）

当館ホームページの
このバナーをクリックして
収蔵資料検索ページへGO!

高知県立文学館ニュース　第87号　令和元年11月30日発行　〒780-0850　高知市丸ノ内1丁目1番20号　電話088-822-0231　FAX 088-871-7857

高知県立文学館　カレンダー

展覧会案内

企画展案内

馬場孤蝶 生誕150年記念展
～馬場孤蝶とその時代～

令和元年（2019）11.30（土）▶ 令和2年（2020）1.19（日）

会　場　高知県立文学館　2階企画展示室　　**開館時間**　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

観覧料　一般400円（320円）、長寿者手帳等お持ちの方・高校生以下は無料（　）内は20名以上の団体料金

翻訳家としても知られる馬場孤蝶は、令和元（2019）年生誕150年を迎えます。この記念の年に、孤蝶の生涯と文学の軌跡を総合的に紹介する初めての展覧会を開催します。

関連イベント

記念講演会

令和元年12月8日（日）午後2時～　要観覧券
演　題　「孤蝶と、おばけと、ミステリー」
講　師　東雅夫氏（アンソロジスト、文芸評論家）
場　所　文学館1階ホール
定　員　100名　※事前申し込みが必要です。

朗読の会

令和元年12月21日（土）午後2時～
「馬場孤蝶と明治文壇の人々」
出　演　カルチャーサポーター
参加費　無料　　場　所　文学館1階ホール

文学散歩「馬場孤蝶　ゆかりの地を訪ねる」

令和元年12月22日（日）、令和2年1月15日（水）午後1時～午後4時、
馬場孤蝶誕生地・馬場孤蝶文学碑・孤蝶・藤村交歓の地碑　他
募　集　各日20名　　参加費　実費（チケット・お茶代等）※詳細はお問い合わせください。

お正月企画

令和2年1月2日（木）3日（金）午前9時～　先着30名（各日）　要観覧券
初詣の帰りには、是非、文学館へ！
先着30名に、素敵な「蝶」の鏡をプレゼント。

クイズ

12月14日（土）、令和2年1月4日（土）、1月5日（日）、1月19日（日）　要観覧券
2階ロビーにて受付　午前10時～午後4時まで

次回企画展予告

ヒグチユウコ展 CIRCUS

会　期　令和2年2月1日（土）～3月29日（日）
午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
休館日　会期中無休
場　所　文学館　2階企画展示室
観覧料　500円（常設展含む）
高校生以下無料
20名以上の団体は2割引

空想と現実を行き交う自由な発想とタッチで、作品制作のみならず絵本の刊行など幅広い活躍をみせる画家・ヒグチユウコさんの、自身初となる大規模個展です。

<ねこのピエロ>2018年 ©Yuko Higuchi

イベント情報

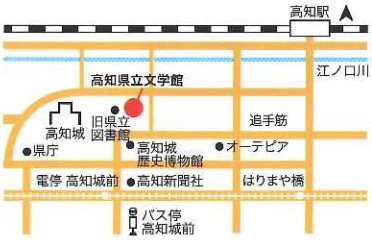
文学マイスター講座

●第9回（令和2年1月25日）
演題「高知の現役詩人③長尾軫　自作を語る　愛この頃」
講師　長尾　軫　先生（詩人）
参加無料・事前に申し込みが必要です。
場所　文学館1階ホール。

利用案内

開館時間　午前9時～午後5時（入館は、午後4時半まで）
休館日　年末年始（12月27日～1月1日）を除き、無休。
※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
観覧料　一般370円　企画展はそれぞれ異なります。
20名以上の団体は2割引。高校生以下無料。
高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病手帳又は被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。
駐車場　なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備　ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設　企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



●高知龍馬空港より空港連絡バス<県庁前行>「高知城前」下車、北へ徒歩5分または<高知駅行>「北はりまや橋」下車、徒歩20分
●JR高知駅下車、徒歩20分（または連絡バス・路面電車を利用）
●路面電車「高知城前」下車、北へ徒歩5分
●バス停「高知城前」下車、北へ徒歩5分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話　088-822-0231
FAX　088-871-7857